〈論　文〉

古典文法学習における係り結び

阿久津　　智

要　旨

係り結びは，高校の古典文法書などにおいては，主に係助詞と文末の用言との呼応関係（いわゆる「係り結びの法則」）として取り上げられている。係り結びは，日本語文法の歴史的研究における重要なテーマであり，この現象に関する研究は，古くから多角的に進められている。その近年の成果を古典文法学習に取り入れることを考えた場合，統語論的観点から，構文として取り上げるほかに，談話分析的観点から，文章中における役割を取り上げることなどもできるであろう。

キーワード：係り結び，古典文法学習，係助詞，中古語

1. はじめに

本稿では，古典文法学習において，係り結びをどのように扱うことができるかについて，考えていく。以下，まず，古典文法学習（教材）において係り結びがどう扱われているかを概観し（2 節），次に，日本語文法研究における係り結び研究の動向について概観し（3 節），続いて，古典文法学習において係り結びをどう扱うことができるかについて検討したい（4 節）。

2. 古典文法学習における係り結び

係り結びは，古典日本語に関する文法研究の中で重要な位置を占める。たとえば，「［係り結びは］日本語研究史の中でも中世から研究されて来ている，最も研究史の蓄積のある問題である上に，国語学者以外の言語学者の興味をも引きつける，注目度の高い現象だ」（金水 2002: 88），「係り結びの変遷を語ると，文法の変遷の話しの半分くらいは済んでしまう」（野村 2011: 74），「この千年紀の日本語の文法に何が起きたのかを考える時には，係り結び衰退の原因を問うことこそが重要な課題であると考えられる」（柳田 2016: 26）などとされ，日本語史や日本語研究史の研究において重要な研究課題とされている。

一方，国語教育では，係り結びは，古典文法学習における，主要な学習（指導）項目となっている。『高等学校学習指導要領』（平成 21 年 3 月）には，「文語のきまり，訓読のきまりなどを理解すること。」（「国語総合」2 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕⑴ア㈠）とあり，この中の「文語のきまり」について，『高等学校学習指導要領解説 国語編』（平成 22 年 6 月）には，「『文語のきまり』には，文語文法のほか歴史的仮名遣いなども含まれる。特に現代語と異なる古文特有のきまりに重点を置いて，仮名遣いや活用の違い，主な助詞・助動詞などの意味・用法，係り結び，敬語の用法の大体などについて指導し，古文を読むことの学習に役立つようにする。」（「国語総合」3 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕⑴ア㈠）とあり，「係り結び」が挙げられている（下線は筆者）。

実際に，高校生向けの古典文法書（副教材）に，係り結びについて，どのような事項が取り上げられているかを，市川孝・山内洋一郎監修『古典読解のための 標準古典文法 三版四訂』（第一学習社 2018）から「係助詞」

の項を，例として挙げておく[1]（注釈や訳，「読解のポイント」[2] などは省略する）。

4　係助詞

種々の語に付いて，強意・疑問・反語などの意味を添え，文末を一定の結びにする助詞を，**係助詞**という。文末の結び方には，A 連体形・已然形で結ぶもの，B 原則として終止形で結ぶもの，の二とおりがある。

A　連体形・已然形で結ぶもの ── 〈係り結びの法則〉 ──

文中に係助詞「ぞ・なむ・や（やは）・か（かは）」が用いられると，文末を連体形で結び，「こそ」が用いられると文末を已然形で結ぶ。このきまりを**「係り結びの法則」**という。

係り結び一覧

<table>
<tr><th>係助詞</th><th>意味</th><th>結びの活用形</th><th rowspan="6">〔普通文〕空　広し。
→　空**ぞ**　広き。
→　空**なむ**　広き。
→　空**や**　広き。
→　空**か**　広き。
→　空**こそ**　広けれ。</th></tr>
<tr><td>ぞ
なむ</td><td>強意</td><td rowspan="2">連体形</td></tr>
<tr><td>や（やは）
か（かは）</td><td>疑問・反語</td></tr>
<tr><td>こそ</td><td>強意</td><td>已然形</td></tr>
</table>

ぞ・なむ・こそ　（種々の語に付く。）

1　強意

1　①その煙，いまだ雲の中へ立ちのぼると**ぞ**言ひ伝へたる。

（竹取物語・富士の山）

②橋を八つ渡せるによりて**なむ**，八橋といひける。　（伊勢物語・九段）

③折節の移りかはる**こそ**，ものごとにあはれなれ。　（徒然草・一九段）

や（やは）・か（かは）　（種々の語に付く。）

1　疑問（……カ）

2　反語（……ダロウカ，イヤ，……デハナイ）

1　④この鏡には，文**や**添ひたりし。　（更級日記・鏡のかげ）

⑤いづれの山**か**，天に近き。　（竹取物語・富士の山）

2　⑥（桐の花は）をかしなど，世の常に言ふべく**やは**ある。

（枕草子・木の花は）

⑦生きとし生けるもの，いづれ**か**歌をよまざりける。　（古今集・序）

◆■係り結びの注意

①　**結びの省略**　係助詞が文中にあっても，それを受ける結びの語が省略されることがある。このような場合，「あり」「侍り」「言ふ」などの語を補えばよい。

・ひとりありかむ身は，こころすべきことに**こそ**（あれ）

（徒然草・八九段）

②　**結びの消滅**　係助詞が文中にあっても，それを受ける述部に接続助詞が付くなどして下に続くときは，係り結びが成立しない。「結びの流れ」ともいう。

・たとひ耳鼻**こそ**切れ失すとも，命ばかりはなどか生きざらむ。

（徒然草・五三段）

③　**「こそ――已然形」の逆接用法**　「こそ」を受ける結び（已然形）のところで文が終止せずに下の句に続くときは，逆接の意味が加わる。「逆接強調」ともいう。

・中垣**こそ**あれ，一つ家のやうなれば，望みて預かれるなり。

（土佐日記・二月一六日）

B　原則として終止形で結ぶもの

は	（種々の語に付く。）
1	**ある事柄を他と区別する。**（……ハ）
1	①木の花**は**，濃きも薄きも紅梅。　（枕草子・木の花は）
も	（種々の語に付く。）
1	**並列**（……モ……モ）

2　添加（……モ・……モマタ）

3　強意（……モ）

1　②色**も**香**も**同じ昔に咲くらめど年ふる人ぞあらたまりける。

（古今集・五七）

2　③聖海上人，そのほか**も**，人あまた誘ひて，　（徒然草・二三六段）

3　④雪の降りたるは，言ふべきに**も**あらず。　（枕草子・春は，あけぼの）

係り結びは，中世の歌学書において注目され，近世に本居宣長によって，その法則性が実証的，体系的に示され[3]，これが明治期の文法教科書などに取り入れられた。明治後半には，大槻文彦が，係り結びを「結法」（「尋常ノ結法」，「ぞ，なむ，や，か，ノ結法」，「こそノ結法」）としてまとめ，この中で結びの流れ（「転結」）などについても取り上げた（大槻 1897）[4]。その後，山田孝雄の「係結といふ事は必しも相対せる語にあらず，［中略］結とは係に対する語にあらずして句の結成をいへるものなり。」[5]（山田 1908: 1301）とする見方，松下大三郎の，「係語は提示的修用語［提示語］の一種であつて［中略］諸種の連用的格へ助辞『ぞ』『なむ』『や』『か』『こそ』『な』［禁止］の附いたもの」[6] で，「係と結の照応を係結と云ふ。」（松下 1928: 717, 782）とする見方，松尾捨治郎の，「係結といふ中に，有らゆる文法上の現象を含ませることが出来る。」（松尾 1928: 51）として，係り結びを「語の断続」とする見方など，係り結びに対する幅広い見方が諸家によって示されたが，こういった学説の多くは，その後の学校文法には取り入れられなかった[7]。文法書で扱われる係り結びの内容は，昭和前半には，ほぼ今日の文法書に見られるようなものになり，たとえば，橋本進吉の『改制新文典別記 文語篇』（冨山房 1938）には，「係結の法則」として，助詞「ぞ」，「なむ（なん）」，「や」，「か」，「こそ」とそれを受ける終止の形が示され，その「注意」として，上に挙げた『標準古典文法』の「係り結びの注意」の①～③に当たるものなどが取り上げら

れている。また，時枝誠記の『日本文法 文語編』（中教出版 1950）には，「係結の法則」，「係結の法則の解消」（結びの流れ），「結びの省略」，「係結の不成立」（「ここにおいてか余もまた惑へり。」，「君の言やよし。」など）が取り上げられている（鈴木 1981 による。下線は筆者）[8]。

今日の学校文法において，「係り結び」は，上に挙げたように，主に係助詞と用言との呼応関係（いわゆる「係り結びの法則」）を指し（小田 2016: 231），その扱いは，形式が中心になっているようである[9]。特に，「強意」の意味をもつ係助詞，「ぞ」，「なむ」，「こそ」は，「特に訳さなくてもよい。」（『基礎から学ぶ 解析古典文法 改訂版』桐原書店 2005: 112）などとされ，大学入試の受験対策としての古典文法学習などでは，その役割があまり重要視されていないようである[10]。

一方で，係り結びを，文の種類や用言の活用と関連させて取り上げる試みも行われている。鈴木康之らのグループは，たとえば，「平叙文」である「草むらに 虫のこゑ す。」に対する形として，「草むらにや 虫のこゑ する。」（「草むらに」を疑う），「草むらに 虫のこゑや する。」（「虫のこゑ」を疑う），「草むらに なにのこゑか する。」，「いづくにか 虫のこゑ する。」などを「疑問文」として，「草むらにぞ 虫のこゑ する」（「草むらに」を強調），「草むらに 虫のこゑぞ する」（「虫のこゑ」を強調），「草むらになむ 虫のこゑ する」（「草むらに」を強調），「草むらに 虫のこゑなむ する」（「虫のこゑ」を強調），「草むらにこそ 虫のこゑ すれ。」（「草むらに」を強調），「草むらに 虫のこゑこそ すれ。」（「虫のこゑ」を強調）などを「強調文」として挙げ，文の種類によって，動詞の終止の形が変わることを示している[11]（鈴木 2010: 34）（表 1）。

このような，係り結びを構文としてとらえ，そこに現れる形態を体系的に示すことは，古典文法の学習や古典の読解に役立つだけでなく，文語文による表現活動などにもつながるものと思われる[12]。

表 1　鈴木康之らによる古典動詞の活用表

		第一終止形 ［平叙文］ ［（終止形）］	第二終止形 ［疑問文］ ［「ぞ」「なむ」の強調文］ ［（連体形）］	第三終止形 ［「こそ」の強調文］ ［（已然形）］
（断定）	一般叙述形 ［現在や未来］	す	する	すれ
	第一過去形 ［過去（1）］	しき	せし	せしか
	第二過去形 ［過去（2）］	しけり	しける	しけれ
（推量）	一般推量形 ［現在や未来の推量］	せむ	せむ	せめ
	過去推量形 ［過去の推量］	しけむ	しけむ	しけめ
命　令　形		せよ	—	—

鈴木（2010: 36）による。［ ］内は，青木（2010: 49）により加えた。

3. 日本語文法研究における係り結び

3 節では，日本語文法研究において，係り結びについて，これまで，どのようなことが問題になっていて，どのような研究が行われ，どのようなことがわかってきているのか（あるいは，どのような見方が示されているのか），について見ていく。

半藤（2003a: 163）は，「係結びをめぐる従来の論述」には，大きく，⑴「文末曲調終止［通常の終止形ではない終止法］という形式面を重視し，意味的な記述をも含めて，古典語の枠組みで捉える」立場と，⑵「現代語にも通ずるものとして，係結びの普遍的価値を見出す」立場との 2 つのものがあるとする。これらの研究は，いずれも，「係結の本格的研究の嚆矢

とされる」本居宣長の研究（『てにをは紐鏡』1771 刊，『詞玉緒』1785 刊）や，「係結」という用語を初めて使い，宣長の研究を「修正」した萩原広道の研究（『てにをは係辞弁』1846 序），これらを「批判的に継承し」，「係結研究の現代における基礎をつくった」山田孝雄の研究（『日本文法論』1908，『日本文法学概論』1936 など）の影響を受けて（あるいは，その解釈をめぐって）進められてきたものである（引用は，小柳 2001: 47）。特に，半藤の⑵に関しては，山田孝雄の「抑も係とは述語の上にありてその陳述の力に関与する義にして，結とは係の影響をうけて陳述をして終止するをいふ」（山田 1936: 476）という考えを継承し，係り結びを「係助詞と文末の述語の呼応関係ばかりでなく，いわゆる『係り受け』の関係までをも含んだ現象」（舩城 1995: 279）として分析する研究にまで発展してきている[13]。

金水（2002: 89）は，もう少し具体的に，「係り結び現象が問いかける問題」を，a. 係助詞の意味・機能，b.「係り」と「結び」の関係について，c. 係り結びの歴史，d. 係り結びの対照研究，の 4 つに大きく分け，さらに，以下のように，細かく分類して示している（一部表記を変えた）。

a．係助詞の意味・機能

a.1 「や」，「か」の意味的・統語的機能は何か。「や」と「か」はどう違うのか。またその歴史的変化は？

a.2 「ぞ」，「なむ」の意味的・統語的機能は何か。「ぞ」と「なむ」はどう違うのか。またその歴史的変化は？

a.3 「こそ」の意味的・統語的機能は何か。またその歴史的変化は？また，「ぞ」と「こそ」の違いとは何か。

b．「係り」と「結び」の関係について

b.1 なぜ「ぞ」「なむ」「や」「か」は“連体形”で結ばれるのか。

b.2 “連体形”とは何か。意味的・統語的機能とは何か。

b.3　なぜ「こそ」は“已然形”で結ばれるのか。

b.4　“已然形”とは何か。意味的・統語的機能とは何か。

b.5　係り結びの「流れ」とは何か。どのような条件のときに流れるのか。

b.6　なぜ係助詞は一文に最大一つしか表れないのか。

b.7　係りと結びの位置関係はどのように記述されるか。

c．「係り」と「結び」の関係について

c.1　係り結びはいつ頃発生したのか。それはなぜ，どのようにしてか。

c.2　係り結びはどのように発達したか。上代の係り結びと中古の係り結びにはどのような相違点があるか。

c.3　係り結びはいつ頃，なぜ，そしてどのようにして滅んだか。あるいは，本当に滅んだのか。

c.4　疑問文はどのように変化してきたか。

d．係り結びの対照研究

d.1　現在，方言に係り結びは残っているか。残っているとすれば，どのようなものか。古代語との共通点，相違点は何か。

d.2　世界の言語に，係り結びに類似の現象はあるのか。あるとすれば，どのようなものか。

ここでは，これを参考に，上の d. を除く，a.〜c. のうち，主なものに関する研究をいくつか挙げておく(14)。

このうち，特に近年研究が盛んに行われているのは，a.1 の「や」と「か」に関する研究，c.1 の係り結びの発生をめぐる研究，また，この両者に関連して，b.2 の連体形についての研究のようである。

a.1 の，「や」と「か」の違いや変遷に関しては，澤瀉久孝の，「［上代に於いて］特に『か』が疑問の意に多く用ゐられ，『や』が詠嘆乃至反語の

意に多く用ゐられた［中略］時代と共にこの『か』と『や』との区別が混用せられ，もと『か』のところへも『や』が用ゐられるやうになつた。」（澤瀉 1938: 15）とする研究が古い。その後，「『か』は『疑い』の気持ちを表し，本来，疑問点指示のはたらきをもつものである。これに対して，『問い』の表現にあずかるのは『や』という助詞で，文中に挿入された『や』が，その文全体の『問い』の性格を強める」（阪倉 1993: 158, 163 などによる）とする説や，「ヤ　疑問詞を承けない　古くは確信ある断定を相手に突きつけ，後に推測・疑問を表明。」，「カ　疑問詞を承ける　自分自身で判断不能と表明。後で相手に尋ねるにも使う。」（大野 1993: 340）とする説[15] などが現れた。近年では，情報構造の観点から，「や」について，「ヤの対・聞き手的な問い掛け性の強さから，意味としての②問い，③反語，④不望予想［話者にとって望んで待たれるようなものではない事態の予想］を説明する。［中略］これらは特有の表現価値を含んだ，上代ヤの領域である。とともに，問い掛けと対・内容的な疑問との連続性から①疑問［本来はカの領域］にヤの領域は拡大していった」（野村 2001: 23）とする説や，各時代における疑問文の調査から，「カが疑いを，ヤが問いを表すという説の妥当性を疑わせる。」，「疑問詞疑問／肯否疑問［イエス・ノー疑問文，一般疑問文］の区別については，各時代の資料で凡そ異なる構文によって区別されていたことが分かった。[16]」（衣畑 2014: 36）などとする分析結果などが示されている。

c.1 の係り結びの発生については，特に連体形結びに関して，重要な起源説として，「倒置説」（大野晋），「挿入説」（阪倉篤義），「注釈説」（野村剛史）がある（名称は，野村 2002: 12 による）。大野（1993）の説は，「A ハ B ゾ　の形であった」ものが「B ゾ A（ハ）　の形に配置」（倒置）されたもの（p. 198），というものである（「ナム・ヤ・カ」も同様）。阪倉（1993）の説は「いわゆる係り助詞の『か』『や』『ぞ』について［中略］連体形終止の喚体的な文が表すいろいろの意味の中に，すでに疑問ないし

は感動の意味が含まれているがゆえに，特にその意味を強調し明確化するものとしてこれらの助詞が挿入された」（p. 224）というものである。野村（1995）の説は，たとえば，「カによる係り結び」については，「連体止め句からはじまって，注釈的二文連置を経，『疑問的事態 ── 実事的事態』の対立的二事態の相関とも言えるものから『―カ―ム』の意味的呼応を伴った係り結びへと至」（p. 24）ったというもので，これは，たとえば，「うま酒を三輪のはふりがいはふ杉手触れし罪か君に逢ひかたき」[17] では，「うま酒を…罪か」（係り句）と「君に逢ひかたき」（連体形止め句）の 2 文が連置され，前者が後者の注釈になっているが，このようなものから，「愛しと我が思ふ妹を思ひつつ行けばかもとな行き悪しかるらむ」[18] のような，「疑念的情意が一文全体を覆う」係り結びに発展した，というものである（「ソ（ゾ）」による係り結びは同様に成立し，「ヤとナム（ナモ）の参加」は遅れたという[19]）。今日では，この説が，最も有力なものとなっているようである[20], [21]。

b.2 については，連体形終止法に関する研究をいくつか挙げておく。小池（1967）は，連体形終止法に，従来いわれてきた余情や詠嘆を表す用法のほかに，「解説的用法」があったことを挙げているが，近年では，山内（2003）が，『源氏物語』の会話や心理の文で，「こういうことでしたと，まとめるところに連体形終止文が現れている。」（p. 141）とし，また，土岐（2005）は，中古の和文会話文において，「連体形終止の表現価値の本質は，当該情報の聞き手による是非の不問性にあり，発話者が聞き手に対して，自己の立場からのある種の主張を行うことを意図するものであると考えられる。」（p. 28）としている。また，吉田（2005）は，中古の仮名散文作品を調査し，「文中に係助詞的要素を持たない会話文が弱活用動詞［終止形と連体形の形態が異なる動詞］を述語として文末に据えるとき，それが終止形である確率とそれが連体形である確率とは，ほぼ半々なのである。さらに，文中に係助詞的要素がある場合，すなわち係り結びを起こ

している場合を含めれば，会話文の弱活用動詞述語文にあっては，終止形より連体形のほうがはるかに優勢だということになる。」（p. 49）と，会話文末における連体形の優位性を明らかにしている[22]。ほかに，談話論（文章論）的な観点から，中古における連体形終止の「なむ」による係り結びについて，「『なむ』の用例に多い『用言の連用形＋て＋なむ』は言い訳の表現である」が，「『はっきりした意志表示』がすでになされている時には，『言い訳，理由』を述べるに当たり，『なむ』を用いない」（木下 2001: 32, 34），「聞き手を納得させるために説明する部分では，ナムが使用される」（西田 2009: 51），「係り結びは叙述の大きな断止を予告するのに有効に機能していた」（小松 2014: 307）などとする説も出されている。「や」による係り結びについては，「『主語＋ヤ～述語＋ム』という文形式」には，疑問や質問というより，「断定回避」と呼ぶべきものや，「危惧」を表す用例が多い（近藤 2017）とする研究なども見られる。

4. 古典文法学習における係り結び（再び）

続いて，係り結びについて，古典文法学習に，何をどう取り入れるべきか考えてみたい。

初めに，古典文法が中古語（平安時代の話し言葉）の文法を基本とするということを確認しておきたい。日本語は，（他の言語と同様に）時代とともに変化してきたが，「日本語では，平安時代の話しことばが手本とされ，書きことばとして用いられてきた。その書きことばには，鎌倉時代以降の話しことばの要素も混じっているが，全体としては，平安時代のことばから大きく隔たることはなかった。こうした平安時代の話しことばに基づく，古典で用いられる言語体系を『古典語』という。」（沖森 2012: 1）とされる。亀井孝は，「過去の文化的遺産が豊富であればあるだけ，文語にもいろいろなものがあっていい道理である。しかし，ここ［『概説文語

文法』］では，平安文学の古典語を中心として述べる。」（亀井 2017: 13）と述べ[23]，小西甚一は，「古典語というなかには，古代語［万葉時代の言い方］が入らない」，「万葉時代の言い方を古典語としてあつかうなら，鎌倉時代はどうだということになり，室町時代・江戸時代……といってくると，活用表がおそろしく複雑になって，とても学校文法には向かない。いちおう古典に出て来るスタンダードな活用のしかたという意味で，中古の和文を基礎とした形が採りあげられているわけなのである。」（小西 2016: 142,144）と述べている。係り結びも，時代によって，その様相が大きく異なるわけであるが（だからこそ，係り結びが日本語研究史の重要なテーマになるのであるが），ここでは，以下，（中古語に基づく）古典文法における係り結びを中心に，考えていくことにする。

中古語の係り結びの（形式上の）特徴については，先に挙げた『標準古典文法』にあるとおりのようであるが，同書にない，細かい点について，近年の係り結び研究の成果として示されたことなどを含め，いくつか箇条書きで挙げておく（以下は，近藤 2010: 84，野村 1995: 22，半藤 2003b: 14，佐佐木 2003: 262 などによった）。

・「か」

「か」は，疑問詞疑問文のみに用いられる。上代では，肯否疑問文にも多く用いられた。

・「や」

「や」は，もっぱら肯否疑問文に用いられる。結びが「む」，「らむ」，「べし」などになることが多い。

なお，係り結びは，中古に盛んに用いられているが，すでに形式化しており，係助詞が情報（疑問）の焦点を表すことはなくなっていた。

・「なむ」

「なむ」は，和歌では用いられにくく，もっぱら散文で用いられる。

使用される時代は，ほぼ中古に限られる。

・「こそ」

「こそ」の係り結びは，逆接条件表現を起源としている。

「こそ」は，ある選択肢の中から１つを選ぶ選択強調（対比用法）に用いられることが多い。その中には，逆接関係を示すものがある。単なる強調（主題的用法）も多い。

・連体形終止法

中古の仮名文学作品の会話文中では，連体形終止法の使用頻度は，終止形と同じかそれ以上に高い。

連体形終止法には，余情や詠嘆を表す用法のほか，解説やまとめを示す用法などもある。

・已然形単独用法（上代）

上代の活用語の已然形には，「こそ」の結びではなく，「ば」，「ど」，「ども」などの助詞が下接しない用法が見られる。これらには，それ以下の表現と間に内容的な因果関係が認められるものが多いが，文をはっきり終止するという機能はそなわっていない[(24)]。

さて，古典文法学習における係り結びの積極的な扱いを考えようとする場合，次の点などが重要になってくるであろう。

①係り結びを構文（文の種類）として扱い，その機能的価値を示す。

②係り結びの文章中における役割を示し，それを読解に取り入れる。

①については，先に挙げた鈴木（2010）に示されているが，鈴木らの表（表１）に「係り」などを加えた表を挙げておく（表２）。

ところで，先に見たように，「強意」の係助詞は，受験対策用の参考書などでは無視されるようであるが，これは，この助詞の機能が，文法カテゴリー的なものでなく，「情緒」的なものだからであろう。

これを，（ユニバーサルな）言語学の観点から見ると，「強意」は，プロ

表 2　古典動詞の活用表（表 1 に「係り」などを加えたもの）

文の種類	平叙文	疑問文		強調文		強調文
係り	（なし）	や	か	ぞ	なむ	こそ
		疑問・反語を表す。肯否疑問文に用いられる。 文末用法がある。	疑問・反語を表す。疑問詞疑問文のみに用いられる。 文末用法がある。	強意を表す。 文末用法がある。	強意を表す。和歌には用いられない。 文末用法はない。	強意を表す。 文末用法はない。
結び	第一終止形（終止形）	第二終止形（連体形）				第三終止形（已然形）
（断定）一般叙述形	す	する				すれ
（断定）第一過去形	しき	せし				せしか
（断定）第二過去形	しけり	しける				しけれ
（推量）一般推量形	せむ	せむ				せめ
（推量）過去推量形	しけむ	しけむ				しけめ
命令形	せよ	—				—
		連体形終止法には，余情や詠嘆を表す用法のほか，解説的な用法などもある。				本来已然形に終止の意味はない。

ソディー（音の高さ，長さ，強さなど）でも表されるもので，また，それを示す言語標識があったとしても，その役割をプロソディーで代替することが可能なものであろう[25]。たとえば，「雪のいと高うはあらで，薄らかに降りたるなどは，いとこそをかしけれ。」（『枕草子』第一七四段）の「いとこそ」は，「こそ」によって「をかし」さの程度の高さを表しているが，音声的に，「いと」の音の高さや大きさを上げたり，あるいは，音を長く延ばしたりして（インテンシティーで），表すことも可能であろう。

また，「父はなほ人にて，母なむ藤原なる。」（『伊勢物語』第一〇段）の「母なむ」は，「なむ」によって「（父はそうではないが）母のほうは」という対比的な強調を表しているが，音声的に，「母（は）」の音の高さや明瞭さを上げて（プロミネンスで），表すことも可能であろう。

これは，「疑問」についても同様で，疑問もプロソディー（上昇調のイントネーション）で表すことができる。ウェイリー（2006: 241）によると，「大多数の言語において，対極疑問文［肯否疑問文，一般疑問文］は文末で上昇調のイントネーションを使う。」といい，角田（2009: 246）によると，「世界の言語の圧倒的多数では，平叙文のイントネーションを変える方法で一般疑問文を作れる。」という。また，角田が調べた 130 の言語のうち，「約 93 の言語，即ち約 72% の言語には一般疑問文を示す印がある。例えば，日本語の『か』である。（日本語の『か』は文末に来るが，他の言語では，文頭に来るものも，その他の位置に来るものも有る。）」という（角田 2009: 246）。この「疑問の印」については，たとえば，「タイ語では，少なくとも話し言葉では，疑問の印 rɨ́ɨ を動かすことによって質問の焦点を示」すことができ，「昨日，マリーはソムサクを見ましたか。」というタイ語の文（タイ語は省略）の場合，「昨日」の後に rɨ́ɨ を付ければ「マリーがソムサクを見たのは昨日ですか？」となり，「マリー」の後に rɨ́ɨ を付ければ「昨日，ソムサクを見たのはマリーですか？」となるという（角田 2009: 15。下線は筆者）。現代日本語では，このような「質問の焦点」に付ける「疑問の印」はない[26]。そのため，現代日本語では「質問の焦点」部分をプロミネンスで表すことになる[27]。

古代日本語では，このような「焦点」は，係助詞で表された。ただし，係助詞のこの働きは，上代末には形式化が始まった（修辞上のもの，形式化したものとなった）ため，中古語では，「～や」や「～か」は，疑問の焦点を表すというより，文全体を疑問文とする印となったとされる（野村 1995: 22 は「疑念的情意は一文全体を覆っているのであるから，『―カ』

は一文の情意の卓立点を示すのみで，特に疑問の焦点を示すわけではない」と述べる）。とはいえ，係助詞が付く部分は，「情意の卓立点」（文の情緒的な強調点）ではあり，その形式と機能とを示すことは重要であろう[28]。

次に，②の「係り結びの文章中における役割を示し，それを読解に取り入れる」ことについて述べる。たとえば，先に挙げたように，「なむ」による係り結びには，談話論（文章論）的に見て，さまざまな用法があるようだが，実際に，作品を読みながら，「なむ」の談話的機能を考えるという学習方法もあるかと思う。たとえば，『竹取物語』や『伊勢物語』などは，文章が短く，比較的読みやすい作品であり，物語を読み進める中で，どういうときに「なむ」が使われているか考える，というやり方などもとりやすいかと思う。

『竹取物語』には，（テキストによって異なるようであるが，筆者が岩波文庫版で数えたところでは）係助詞の「なむ（なん）」は 36 例あり，そのうち会話文中のものが 28 例，地の文のものが 8 例であった。以下に，地の文のうち，5 例を挙げる[29]（阪倉篤義校訂『竹取物語』岩波書店（岩波文庫）1970 による。ページは同書のもの。下線は筆者）。

(1)　名をば，さかきの造となむいひける。（p. 9）
(2)　さる時よりなむ「よばひ」とは言ひける。（p. 11）
(3)　これをなむ「玉さかる」とは言ひはじめける。（p. 24）
(4)　それよりなん，すこしうれしき事をば，「かひある」とは言ひける。（p. 39）
(5)　そのよしうけたまはりて，つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん，その山を「ふじの山」とは名づけゝる。（p. 56）

これらは，すべて人や物事の言い方について述べたもので，このうち，

⑴以外はその言い方のいわれを語っている。また，これらは，話が一段落ついたところで使われている。同書の「解説」によると，この物語における「和文特有の助動詞『けり』によってむすばれている文の現れ方には，一つの傾向」があり，「この『けり』止め文が集中的に現れる」のは「各章の冒頭と結末の部分」で，「それぞれの章は，いわばこの『けり』止めの文章によって縁取りされている」という。上の⑴～⑸は，すべて「ける」で終わっており，⑴と⑵は章の冒頭部に，⑶～⑸は章の結末部に現れている（実は，⑴と⑵も，このあとから本題に入るという部分（いわば，小部分の結末部）に使われている）。つまり，この「…なむ…ける」は，言葉のいわれなどを語ることによって，物語の内容的な切れ目を示す役割を担っているといえよう。係り結びを追いながら，文章を読むことで，このようなことを考えることができるのではないかと思う。

5. おわりに

本稿では，古典文法学習における係り結びの扱いを考えてみた。

上では触れなかったが，「特に訳さなくてもよい」とされる「ぞ」や「なむ」について，これらが現代語のどういう言い方に当たるか，作品を読みながら考えるなどという学習もできるかと思う[30]。ちなみに，本居宣長は，『古今集遠鏡』(1797 刊）巻一「例言」で，「ぞ」を「サ」と訳している（船城 2013: 261)。その一部を引用して，以下に挙げておく（「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」による。表記を一部改めた)。

> ○てにをはの事 「ぞ」文字は，訳すべき詞なし。たとへば「花ぞ昔の香に匂ひける」のごとき，殊に力を入れたる「ぞ」なるを，俗言には「花ガ」と言ひて，そこに力を入れて，勢ひにて，雅語の「ぞ」の意に聞かすることなるを，しか口に言ふ勢ひは，物には書きとるべく

もあらざれば，今は「サ」といふ辞を添へて，「ぞ」に当てて，「花ガサ昔ノ」云々と訳す。「ぞ」文字の例，みな然り。（はし六オ）

一方で，「…ぞ…」を，「『……ぞ（ダ）！』で一応言い切」る，「判断を『ぞ』に集約して強調する」，「『ドウシタ〔ドンナダ・何ダ〕コト』のような意味の連体形括りは，判断を対象への観入或いは対象の想起に切替える」として，「…ヨ！…コト！」と訳すものなどもある（桑田 1969: 387, 385）。たとえば，『竹取物語』の「今はとて天の羽衣着る折りぞ君をあはれと思ひいでける」は，「……折リニナッテデスヨ！……思イ出シマシタコト！」のように訳される（下線は筆者）。宣長の「サ」に比べて，感情の表出がずいぶんと大きく感じられるが，これは，「情思の昂揚が一旦『ぞ』で爆発する」と見ているためである。

《注》

（1） 中学校の国語教科書における係り結びの取扱いについては，飯田（2016: 313）に紹介されている。飯田は「古典解釈のための体系的な文法事項として『係り結び』に触れるものが一般的である。」と述べている。

（2）「読解のポイント」では，「『や・か・ぞ・は・も』の文末用法」，「『もぞ』『もこそ』の用法」，「『は』のはたらき」が取り上げられている。

（3） 本居宣長は，「てにをはは。神代よりおのづから万のことばにそなはりて。その本末をかなへあはするさだまりなん有て。あがれる世にはさらにもいはず。中昔のほどまでも。おのづからよくとゝのひて。たがへるふしはをさ〳〵なかりける」と述べている（『詞瓊綸（ことばのたまのお） 一之巻』『増補 本居宣長全集 第九』1902 初版，1927 増補再版 p. 9）。宣長以前の研究については，佐藤 1977，仁田 1984 などを参照。

（4） 山田孝雄は，「係結の大体は大槻氏の所論にて足れり。」（山田 1908: 1295）と述べている。

（5） 舩城（2013: 168）によれば，山田孝雄は，『日本文法論』(1908）において，「〈かかりむすび〉が『修辞』的な文である」としていたが，『日本文法学概論』(1936）では「〈かかりむすび〉を修辞上の問題から除外して，全面的に構文論上のそれとするもの」と考えるようになったという。なお，山田

（1908: 612）は，「は」，「も」，「ぞ」，「なむ」，「こそ」，「や」，「か」，「な」（禁止）を「係助詞」とした（山田 1936 も，文語については同様である）。

（6） 松下（1928: 712）は，「提示語の中には，一，題目語，二，特提語，三，係語，この三種，及び此れらの混合したものが有る。簡単に言えば『は』『も』の附いたのが題目語，『ぞ』『なむ』『や』『か』『こそ』『な』の附いたのが係語，『のみ』『すら』『だに』『さへ』などの附いたのが特提語である。」としている。

（7） 山田（1908）は，「明治三十五年六月廿九日」（1902 年）の日付のある「緒言」の最後に，自著について，「今若この説を採りて直に普通の教育に施す者あらば，実に大早計の事にして著者の深く遺憾とする所なり。［中略］若社会が之を公認せば其の時はじめて普通の教育に応用せらるべし。学問の研究と教育の施設とを混同せざらむことを望む。」と述べている。

（8） 大野（1993: 335）は，この時期の係り結び研究について，「橋本進吉・時枝誠記という，今日の日本文法研究に大きい影響を与えている学者の文法体系においても正面に据えて考察されることはなかったし，問題として取り扱われてもいなかった。一般にこれは日本語の古典語だけに見られる特殊な現象で，特定の助詞と文末の終結部の呼応の問題にすぎないと扱われてきた。」と述べている

（9） 高等学校の教科書（国語総合）には（筆者の見た限りでは），いずれも，「係助詞」として，「は」，「も」，「ぞ」，「なむ（なん）」，「や（やは）」，「か（かは）」，「こそ」が挙げられているが，「係り結び（の法則）」としては，「ぞ」，「なむ（なん）」，「や（やは）」，「か（かは）」，「こそ」を用いるものだけが取り上げられている。なお，飯田（2016: 317）には，「学校文法で一般に係り結びに含めない『は・も―終止形』を係り結びとしているところに特徴がある」中学校の教科書（学校図書『中学校国語Ⅰ』2012）が紹介されている。

（10） 大学入試受験対策の古文の参考書には，試験問題の本文にある「強意」の「ぞ・なむ・こそ」について，「受験生は訳す必要はありません。私はいつも，『ぞ・なむ・こそ』は，上から×をして消させます。」などと述べられている（荻野文子『マドンナ古文 パワーアップ版』学研教育出版 2013: 49）。

（11） 鈴木（2010）の各終止形（表 1 参照）について，大槻（1897）には，「第一終止法」，「第二終止法」，「第三終止法」とある（鈴木 2010: 35）。佐伯（1988: 137）では，「普通終止法」，「ゾ・ナム終止法」，「ヤ・カ終止法」，「コソ終止法」，「命令終止法」などを使っている。

(12)　文語文を書く活動については，新『高等学校学習指導要領』（平成 30 年 3 月）「国語」に「古典を読み，その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢詩を創作したり，体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。」（「古典探究」2 内容〔思考力，判断力，表現力等〕A 読むこと⑵ウ）として挙げられている（下線は筆者）。

(13)　たとえば，森重（1971: 159）は，「結びは活用形に限らず，ある種の呼応関係のもとに成立する何らかの形であればよい」という「最広義の係り結び」説を示し，尾上（1982: 16）は，「伝達の中で結果として帯びてしまう断続関係」を「消極的係結び」と呼び，川端（1994: 1）は，「係結は，述体の基本構造を形式化的に表現するものである。」（「述体」は，「一つのことがらを関係的な二つの項に分節し，分節された二項を，そのようなものとして統一する作用にあってそのことがらを叙述することの形式」（川端 1994: 13））と述べている。

(14)　ほかに，係り結び研究の歴史に関する研究などもある（これについては，本稿で，その一部に触れている）。また，「d. 係り結びの対照研究」に関しては，『日本語文法事典』（大修館書店 2014）「係り結び（方言）」，『言語学大辞典 6 術語編』（三省堂 1996）「係り結び」の「世界の言語に見られる係り結び」などを参照。

(15)　大野（1993）は，「疑問詞を承けない」か「疑問詞を承ける」かによって，係助詞を「二つの系列」に分けている。前者には，「ハ・コソ・ナム・ヤ」があり，これらは「承ける語」を「確定・既知・旧情報」として扱い，後者には，「モ・ゾ・カ」があり，「承ける語」を「不確定・未知・新情報」として扱うとしている（p. 340）。

(16)　疑問詞疑問には，『万葉集』に，「カ係り」と「疑問の助詞無し」が（ほかに，「カ文末」もある），『源氏物語』に，「カ係り」と「疑問の助詞無し」が現れ，肯否疑問には，『万葉集』に，「カ係り」，「ヤ文末」，「ヤ係り」，「カ文末」が，『源氏物語』に，「ヤ文末」，「ヤ係り」，「カ文末」が現れる（衣畑 2014: 93）。

(17)　『新編 日本文学全集 6 万葉集①』（小島憲之・木下正俊・東野治之 校注・訳，小学館 1994）巻第四（712 番歌）の訳は，「（味酒を）三輪の神人が 大事にしている神木の杉に 手を触れた罰でしょうか あなたにお会いできないのは」である。

(18)　『新編 日本文学全集 9 万葉集④』巻第十五（3729 番歌）の訳は，「心底から 愛しているあなたのことを 思いながら 行くせいでこうもひどく 行きづらいのだろうか」である。

(19)　野村（2002: 32,35）は，「連体形による係り結びは本来カとソによる体制であったものが，カと意味のよく似たところのあるヤが，何らかの形でカのあるべき場所に交代的に侵入し，次第にその領域を拡大して，ついには疑問語以外の地点からすべてのカを追放したと推定することができよう。」，「もともと間投助詞的な性格のナモが，恐らくはソの位置に投入されたのではないかと考えられる。」と述べている。なお，野村（2005: 45）は，「係り結びの消滅」については，「通説によれば，係り結びの崩壊には連体形終止の一般化が与ってもたらしたものと言われる」が，そこには，「間投助詞化した係助詞が自在に脱落した結果として大量の連体形終止が一挙に発生したというストーリー」があったという説を出している。

(20)　日本語学会の学会誌『日本語の研究』の「日本語学界の展望」号には，「現在の係り結び論の中で最も有力な仮説であると思う。」（青木博史「2004年・2005年における日本語学界の展望　文法（史的研究）」『日本語の研究』2-3，2006: 22），「野村剛史の説が支持を広げている」（小柳智一「2010年・2011年における日本語学界の展望　文法（史的研究）」『日本語の研究』8-3，2012: 24）などとある。

(21)　ほかに，たとえば，沖森（2012）の「『ぞ・なむ・や・か』が連体形で結ばれるのは倒置法に由来するものである。／降りたる［連体形］雪ぞ / か → 雪ぞ / か 降りたる［連体形］」（p. 99）とする説（大野 1993 の「倒置説」は，もとの動詞（連体形）が準体法，こちらは連体修飾法。ただし，大野 1998: 224 では，「『か』の係結びは倒置法に起源がある」として，「満ちぬる潮か」を「潮か満ちぬる」と倒置させていう例を挙げている），柳田（2016）の「係助詞『カ』『ヤ』『ゾ』『ナム』の起源を終助詞と見」て，「もともとは／虎か。吠ゆる。／という二文であった。『虎か。』で文は中止しており，「虎であろうか。」という意を表した。そしてこれに『吠えているのは』または『吠えていることだ。』という意味を第二文が補足した。この二文が，やがて，／虎か吠ゆる。／という主述関係と意識されるようになった。」（p. 152）とする説（「補足説」）などもある（野村 1995 の「注釈説」は係り句が注釈，こちらは結び句が補足）（／は改行）。

(22)　小木曽（2015: 73）にも，中古における「連体形終止の文の作品別・係り別用例数」が挙げられている。

(23)　同書の「解説」（屋名池誠執筆）によれば，「本書刊行の時点［1955 初版］で成人の読者が『文語』という名称から思い浮かべるのは『近代文語』［戦前・戦中まで使われていた文語］だったのであり，『文語文法』といえばこの『近代文語』をまちがえずに使うための規範のことだった」（亀井 2017:

230）という。なお，山田孝雄の『日本文法論』(1908）は，その「緒言」に「本論は如何なる時代の言語を対象とせるかと問ふ人あらむ。［中略］其の主とする所は散文に於いて，律語に於いて，現代の標準的記載語として用ゐらるものを対象としたり。」とあり，同書は「古典文法」を論じたものではないようである（『日本文法学概論』には，「現代の文語と目すべきものは，大体書籍雑誌等に於ける論説の如きもの，又所謂口語体以外の雑録類又詔勅法例に用ゐらるゝ文章の如きものをさすと知るべし。」（山田 1936: 11）とある）。一方，大槻文彦の『広日本文典』(1897）は，「例言」で「書中の語法は，宗と，中古言に拠りて立てつ，」と述べている。

(24)　石田（1939）は，「こそ」による係り結びについても，本来終止の意味はないとして，「平安時代に入ると已然形が［本来］終止を表はすものでなく必ず後文のあるべき形式であるのを利用して，たゞ物としもなき余情を残すために，コソ—已然形だけで終へるといふ様式が愛用され」，「之が濫用され模倣される結果，余情を残し得ない様な場合にも用ゐられ，普通の終止と択ぶ所のないものをも生ずるに至つた。」（p. 80）と述べている。一方，沖森（2016: 85）は，「已然形はそこで強く言い切る働きをするのが本来の用法であり，次に続く文との関係で，文脈上から，そのことを契機として次の物事が生じるというように解釈されることが多くなったため，確定条件，特に順接のそれを表すようになった」としている。

(25)　北原（1984: 265）は，「プロミネンスの発達によって，係助詞『こそ』『ぞ』などが用いられなくなったと考えることができる。」と述べているが，小松（2014: 297）は，これを批判し，「プロミネンスは［中略］その部分を際立たせて発音することによって強く印象づけることである。書記テクストでは追跡できないが，人間がことばを使い始めて間もなくから，どの言語を問わず，あまねく使ってきた手法に違いない。それが，係り結びの消域にひと役買ったとは考えがたい。」としている。

(26)　角田（2009）の「大付録 語順の表」によると，角田が調査した 130 の言語中に，「疑問の印」を「質問の焦点の直後」におく言語は，（「(?)」とあるものを含めて）11 ある（トルコ語，ベンガリ語（?），タミル語，カンナダ語，タイ語，マレイ語（「文頭」もあり），グニヤンディ語，ハカル語（?），アイマラ語（?），ケチュア語，コチ語（「普通は V」の直後））。

(27)　ただし，対比の「は」を使って，「昨日」を「質問の焦点」にして，「昨日は，マリーはソムサクを見ましたか。」ということなどはできる。

(28)　室城（2016）は，『伊勢物語』第二三段「筒井筒」にある「風吹けば沖つ白波竜田山夜半にや君が一人越ゆらむ」を取り上げ，係助詞「や」を「疑

問の対象」ととらえて，作品を解釈することを説いている。「『夜半にや』と『越ゆらむ』が係り結びになっているのだから，係助詞『や』によって疑問の対象になっているのは，『夜半に越ゆらむ』の部分である。」，「『夜半』の時間を男とともに共有したいという，もとからの妻の思いが，『夜半にや』と『越ゆらむ』の係り結びの表現にこもっている。」（p. 125）と述べている。

(29)　残りの 3 例は，「その竹の中に，もと光る竹なむ一筋ありける。」（p. 9），「御門，かぐや姫を止めて帰り給はむことを，あかずくちおしく覚しけれど，玉しゐを止めたる心地してなむ帰らせ給ける。」（p. 44），「翁，今年は五十ばかりなりけれども，物思ふには，かた時になむ老になりにけると見ゆ。」（p. 48）である（下線は筆者）。

(30)　田辺正夫『新訂 古典文法』（大修館書店 1986: 97）では，「ぞ」に「……ゾ・……（ハ）ソリャ」という訳を載せ，「文の詞などぞ，昔の反古どもはいみじき。」（徒然草・二二段）を「手紙の文句などはそりゃ，昔の反古紙などには非常に立派なものがある。」と訳している（下線は筆者）。

参考文献

青木和男（2010）「文末表現を軸とする動詞活用の体系的指導」『「日本語学」特集テーマ別ファイル 普及版 文法 2』明治書院

阿久津智（2010）「対照研究の観点としての『文法現象の標示手段』」『立教大学日本語研究』17 立教大学日本語研究会

飯田晴巳（2016）「学校文法 ――〈古典解釈〉の取扱い ――」中山緑朗・飯田晴巳監修『品詞別 学校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院

石田春昭（1939）「コソケレ形式の本義（下）」『国語と国文学』16-3 東京帝国大学国文学研究室

リンゼイ J. ウェイリー，大堀壽夫・古賀裕章・山泉実訳（2006）『言語類型論入門』岩波書店

大槻文彦（1897）『広日本文典』大槻文彦

大野晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店

大野晋（1998）『古典文法質問箱』KADOKAWA（初版 1988『日本語の文法 古典編』角川書店）

小木曽智信（2015）「コーパス活用の勘所 17 日本語史 中古語の文法⑵ 係り結びと連体形終止」『日本語学』34-10 明治書院

沖森卓也編著，山本真吾・永井悦子（2012）『古典文法の基礎』朝倉書店

沖森卓也（2016）「時代別〈古典解釈と文法〉―― 上代語 ――」中山緑朗・飯田

晴巳監修『品詞別 学校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院
小田勝（2016）「古典解釈と構文論」中山緑朗・飯田晴巳監修『品詞別 学校文法講座 第五巻 助詞』明治書院
小田勝（2018）『読解のための古典文法教室』和泉書院
尾上圭介（1982）「文の基本構成・史的展開」川端善明ほか編『講座日本語学 文法史』2 明治書院
澤瀉久孝（1938）「『か』より『や』への推移 下」『国語国文』8-5 京都帝国大学国文学会
亀井孝（2017）『概説文語文法 改訂版』筑摩書房（初版 1955 吉川弘文館，改訂版 1957 吉川弘文館）
川端善明（1994）「係結の形式」『国語学』176 国語学会
北原保雄（1984）『文法的に考える：日本語の表現と文法』大修館書店
衣畑智秀（2014）「上代から中世の疑問文の様相：データ解釈を中心に」『福岡大學人文論叢』46-1 福岡大学
木下書子（2001）「断りのストラテジーから見た係助詞『なむ』の用法」『尚絅大学 研究紀要』24 尚絅大学
金水敏（2002）「日本語文法の歴史的研究における理論と記述」『日本語文法』2-2 日本文法学会／くろしお出版
桑田明（1969）「係り結びとは」『佐伯梅友博士古稀記念 国語学論集』表現社
小池清治（1967）「連体形終止法の表現効果：今昔物語集・源氏物語を中心に」『国文学 言語と文芸』54（9-5）大修館書店
小西甚一（2016）『国文法ちかみち』筑摩書房（初版 1959 洛陽社，改訂版 1973 洛陽社）
小松英雄（2014）『日本語を動的にとらえる：ことばは使い手が進化させる』笠間書院
小柳智一（2001）「係結についての覚書：学史風」『学芸国語国文学』33 東京学芸大学国語国文学会
近藤要司（2010）「係り結び」高山善行・青木博史編『ガイドブック 日本文法史』ひつじ書房
近藤要司（2017）「中古における疑問係助詞ヤの脱疑問化について」『神戸親和女子大学言語文化研究』11 神戸親和女子大学文学部総合文化学科
佐伯梅友（1988）『古文読解のための文法 上』三省堂
佐伯梅友監修，鈴木康之（1977）『日本語文法の基礎』三省堂
佐伯梅友・鈴木康之監修，日本語文法研究会編（1988）『概説・古典日本語文法』桜楓社

阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』岩波書店
佐佐木隆（2003）『上代語構文論』武蔵野書院
佐藤稔（1977）「係り結びの把握：中世歌学から山田孝雄まで」『山形女子短期大学紀要』9 山形女子短期大学
鈴木一彦（1981）『時枝誠記 日本文法・同別記 文語編』東宛社（初刊 1950, 1952 中教出版）
鈴木康之（2010）「古典語動詞の活用をどうとらえるべきか：佐伯梅友を再考する」『「日本語学」特集テーマ別ファイル 普及版 文法 2』明治書院
角田太作（2009）『世界の言語と日本語 改訂版』くろしお出版（初版 1991）
土岐留美江（2005）「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4 日本語学会
西田隆政（2009）「竹取物語の会話文の『文末表現』：和文の会話文の文体的特徴をめぐって」『文学史研究』49 大阪市立大学
仁田義雄（1984）「係結びについて」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法⑤ 助辞編（一）助詞』明治書院
野村剛史（1995）「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9 京都大学文学部国語学国文学研究室
野村剛史（2001）「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-1 京都大学文学部国語学国文学研究室
野村剛史（2002）「日本語研究　連体形による係り結びの展開」上田博人編『日本語学と言語教育』（シリーズ言語科学 5）東京大学出版
野村剛史（2005）「中古係り結びの変容」『国語と国文学』82-11 東京大学国語国文学会
野村剛史（2011）『話し言葉の日本史』吉川弘文館
半藤英明（2003a）『係助詞と係結びの本質』新典社
半藤英明（2003b）『係結びと係助詞：「こそ」構文の歴史と用法』新典社
舩城俊太郎（1995）「係結び」山口明穂編『国文法講座 3　古典解釈と文法：助詞の機能』明治書院
舩城俊太郎（2013）『かかりむすび考』勉誠出版
松尾捨治郎（1928）『国文法論纂』文学社
松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』紀元社
室城秀之（2016）「時代別〈古典解釈と文法〉── 中古語 ──」中山緑朗・飯田晴巳監修『品詞別 学校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院
森重敏（1971）『日本文法の諸問題』笠間書院
柳田征司（2016）『日本語の歴史 6 主格助詞「ガ」の千年紀』武蔵野書院

山内洋一郎（2003）『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版
山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館
山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館
吉田茂晃（2005）「“結び”の活用形について」『国語と国文学』82-11 東京大学国語国文学会

（原稿受付　2018 年 6 月 28 日）